

<弘前の「忍者屋敷」に移住しようかと一瞬だけ思った話>

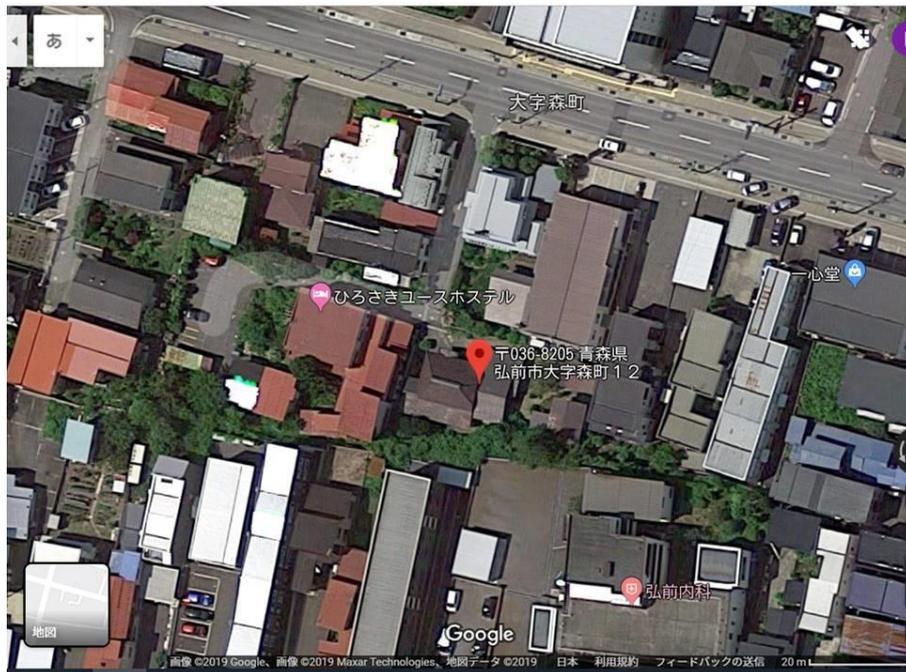
子供の頃は宿題をやらずに山形城址の石垣を登ったりお濠でフナを釣ったりして遊んでいたのですが、忍者には興味がありました(正確にいうと少し遊んだ後で早めに家に帰って宿題をやるつもりだったのに、つい遊びすぎたのです)。

数日前に弘前城からほど近い弘前市森町にある忍者屋敷(と思われる古民家)が売りに出るということを知ったので、所有者に電話して値段を聞いてみました。土地代が2,500万円、建物は0円で、固定資産税が年間15万円、冬の雪囲いの設置と撤去に4万円/年、草取りが1万5千円×2回/年、他に数年に一度は立木の世話を植木屋さんを頼む必要があるとのこと。同じ町内で売りに出ている不動産物件の価格と国税庁の路線価格が一致し、相場は12万円/坪位の様です。Google Mapの衛星写真で見ると路地裏のような場所ですが敷地は結構広そうで、計算値の200坪は確かにありそうです。

伊賀以外で忍者屋敷が見つかったのは初めてとのことですので貴重ですし、青森大学には「忍者部」があるそうですが、弘前は豪雪地帯。前の所有者が増改築した部分を原状復帰し、暖房機器は見えないようにカモフラージュし、光ファイバー回線を引いて移住し、忍者部の学生さん達に遊んでもらう生活も悪くないかな、と一瞬は思いましたが、やはり無理ですね。

(所在地: Google Map)





弘前の忍者屋敷・・・続き(20190913)

あと10歳若ければ、いろいろな選択肢がありそうです。とりあえず数瞬ほどは考えてみました。移住型モデルなら資金の問題はなく、体力と気力、認知能力の維持が課題でしょう。資金が必要なモデルはNPOか株式会社でしょうね。現地の人材は青森大学「忍者部」の若者のアルバイトで確保できそうです。

- ①ある程度リフォームして自分が居住し、自己満足に浸る
- ②近くに住み、NPOの保存会を設立して「忍者部」の若者達と遊びながら老後を過ごす
- ③株式会社「忍者ゴッコ」を設立して外国人観光客相手のエンタメ事業を始める
- ④学者の協力を得て江戸時代の状態に復旧し付加価値を高め文化財として弘前市に高く買取ってもらう（不動産の逆リフォームビジネス。今はただの古民家なので建物価格は0円）
- ⑤隣接の老朽化したユースホステルが4000万円ですり出ているのでそれも買ってリフォームし、宿舎付きの外国人マニア向け「忍者学校」を設立する（もちろん複数言語対応。忍者の修行なのだから宿舎は簡素なもので十分）
- ⑥伊賀市の観光部と話を付けて弘前支所として連携して観光ビジネスをする。
- ⑦韓流ドラマのような想像力と捏造力を駆使して実在人物の名前以外は全部創作という、忍者を主人公にした歴史ドラマの脚本を書いてTV局に売り込む（残念ながらそういう能力はないが・・・）
- ⑧う～ん（あと二つは欲しいところ。アイディアは百個あればひとつ位はキラリと光るもの

があるはず。十個では全然足りませんが)

(その他の考察)

- ・古い城下町の市役所にはビジネス感覚も予算もないはずで、補助金などで力になってもらうのは期待薄（今までの経緯からも明白）。
- ・忍者に興味があるのは外国人で、ネットを使えば集客は可能。マルチリンガルのサイトを作って噂が噂を呼ぶようにできれば世界中から人は来る。弘前城が近いので雰囲気は悪くないかも。
- ・雪の多い所なので観光的には不利だが、逆手にとって雪の弘前城を舞台に活躍する忍者のイメージを前面に出すのも一法か。

弘前「忍者屋敷」売却へ

2019/09/08 11:00 **東奥日報**



江戸時代後期から忍者が利用していたと考えられている青森県弘前市森町の「忍者屋敷」を、所有者が売却する意向を固めたことが分かった。忍者屋敷の研究を続けてきた青森大忍者部顧問の清川繁人教授は「保存を考えている人が購入してくれればいい」と願っているものの、買い手の意向によっては取り壊しの可能性もある。

清川教授によると「忍者屋敷」は杉山伊太郎、棟方嘉吉ら忍者の一族と考えられる者が所有してきたという。弘前藩に仕えた忍者集団「早道之者（はやみちのもの）」が集会などに

利用していた可能性がある」とみている。現存する忍者屋敷は国内でも珍しく、人が隠れられる空間や薬草を干した形跡などがある。

「忍者屋敷」を約 30 年間管理してきた會田秀明さん夫妻＝青森市＝は、税金や屋敷の手入れなどにかかる費用の負担が大きいことから、手放すことを決断した。7 日までの取材に、秀明さん(83)は「自分も年を取り、肉体的にも経済的にも手放さざるを得ない。できれば屋敷ごと買い取って保存してくれる人がいれらうれしい」と話した。

弘前市に保存を要請したこともあるが、前の所有者が住居として利用するために増改築を施したことなどを理由に断られたという。

弘前コンベンション協会は 9 月 22 日、10 月 12、20 日の 3 日間、「最後の」と銘打った忍者屋敷ツアーを開催する。ガイドを務める清川教授は「観光資源としてもっと活用できるはず。新しい所有者が保存を望むのであれば、変わらず支援していきたい」と話した。

購入の問い合わせは會田さん（電話 017-743-7009）へ。

弘前経済新聞

暮らす・働く 2016.11.16

弘前の古民家が「忍者屋敷」と話題に 「残し続けたい」と所有者



古民家の所有者・会田秀明さん

弘前市内で現在、青森県民芸協会会長の会田秀明さんが所有する古民家が「忍者屋敷では」と話題になっている。

床の間が狭く、押入れの奥行と比較すると隙間があることがわかる

江戸時代に建てられたといわれる同家屋は、客間と寝室の床の間の裏に人が1人隠れられるスペース(幅 60 センチ×奥行き 95 センチ)や、人の侵入などを音で知らせる「ウグイス張り」のような仕掛けがある。

会田さんによると、青森県民芸協会創設者の相馬貞三さんが1952(昭和27)年に購入した家屋で、1989年まで相馬さんが住居として使っていたが、相馬さんが亡くなった後は、民芸品の販売会やイベントなどに使っていたという。会田さんは「80歳となり、家屋を維持するのも難しくなってきた」と話す。

古民家調査を行った青森大学薬学部薬学科教授の清川繁人さんは「同家屋の2つ前の家主の棟方嘉吉さんが忍者の関係者だったのかもしれない」と推測する。清川さんによると、職業としての忍者は江戸期以降に衰退していったと見られるが、津軽藩では「早道之者(はやみちのもの)」という忍者集団が長く存続していたという。「ロシア船が蝦夷地に上陸を始め、北方警備をするために早道之者が動員された歴史的背景があり、津軽藩では忍者が残り続けた」と話す。

会田さんは「取り壊すことも考え、今年2月ごろから動き始めていた。地元で話題となったことで、残してほしいといった声やアドバイスなどをいただくようになりうれしい」とも。現在は弘前市教育委員会が調査を進めており、年度内には間取り図などを資料として作成するという。

会田さんは「30年近く管理してきたため、文化財として市などに引き取ってもらえればうれしいが、かなわないのであれば、誰かに残し続けてもらいたい」と話す。

清川さんは「忍者は薬の知識が豊富で薬業に転じた忍者も多かった。棟方さんから買い取った際、薬草の匂いが強かったという話があったころからも忍者屋敷だった可能性が高い」と期待を込める。



弘前市下白銀町

広瀬院長の弘前ブログ

青森県弘前市で矯正歯科クリニックを開業している広瀬です。最新の矯正歯科治療、大好きな弘前の町やこの町が生んだ隠れた偉人について紹介したいと思います

2018年2月16日 金曜日

弘前の忍者屋敷と早道ノ者 1





ブログを見ていただいている方から弘前の忍者屋敷についての問い合わせがあった。弘前城の南にある青森県民芸協会会長、会田さん所有の古民家は、青森大学の清川教授の調査によれば江戸時代の忍者屋敷の可能性があり、保存を希望しているとの話であった。全国新聞でも報道されたようだが、うっかりしていて記憶にない。そして清川教授によれば、この古民家のもともとの持ち主は棟方嘉吉という人物で、弘前藩の忍者集団“早道の者”の頭領、棟方晴吉(貞敬)の近親者でないかとしている。その民家には隠し部屋や鳴る床板などの工夫があり、忍者屋敷ではないかというのだ。

“早道の者”は、延宝元年(1673)に江戸で召し抱えられた忍者、中川小隼人から始まり(ちなみに明治二年絵図には、中川姓は中川弥五郎(富田新割町)、中川寛蔵(教育者、若党町)、中川孝三郎(五十石町小路)の三名がいる)、その後、定員は十四名で、物頭は家老、大目付が兼ね、小頭二名に、その他、並みの者という構成であった。小頭で六十俵四人扶持の下級武士であるから、並みの者はさらに低い禄であった。天保(1830年代)の頃の早道ノ者に佐藤文弥、佐藤惣右衛門の名があるが(弘前藩明治一統誌 人名録)、どのような人物が早道ノ者であったか、あるいは世襲したのかは、わかっていない。初期の“早道の者”は、いわゆる黒装束で活動する忍者というイメージもあったが、その後は、情報集団(隠密)、例えば幕末期でいえば、各地に派遣されて情報収集を主に行っていたようで、薩摩、長州、京都の動きを的確に捉え、それに藩に報告していた。独立した藩としては、こうした情報活動は当然であり、何も忍者というような範疇に入れる仕事ではない。さらに弘前藩では、何度も御家騒動があったので、上層部が藩士の動向を知るには隠密として早道ノ者は役立ったであろう。また隣接する南部藩とは境界を巡る問題が度々発生し、隣藩の動向を知る必要もあった。とりわけ本州の北の端である弘前藩は、中央とは隔絶しがちで、それ故、他国以上に情報収集に力を注いだ。

棟方嘉吉は、明治二年弘前絵図では塩分町に近い、森町小路というところにその名が見える。この小路は不思議な道で、森町の道から南に折れ、途中で止まっている。通常、小路は他の道に繋がるものだが、この森町小路だけが行き止まりの道となっている。小路の奥にある原子文弥、棟方嘉吉、佐藤万太郎の家に用事がなければ、この小路を通ることはない。さらに佐藤万太郎家の玄関は本町に

向いており(名前の最初の向きが玄関となる)、本町の方から入ったのであろうか。森町小路は非常に特殊な通路で、棟方家と原子家のための道と考えると良い。

そうしたこともあって、先週、雪の中を実際に訪ねてみた。森町の道は何度も通ったが、この小路については全く気づかなかった。消防署から50mくらい進んだところに幅3mほどの道があり、私道のように、立ち入るのは躊躇われたが、思い切って入っていくと、そこには平屋の古民家があった。住む人がいないせいか、雪に囲まれているが、比較的保存状態はよい。新聞によると幕末ころの建物とされているが、これまであまり報告されていない家である。弘前市では昭和60年頃に江戸時代の民家を調べ、数冊の調査報告書を作成し、平面図などの調査結果を載せているが、どうもこの森町小路の家は抜けている。奥まっているため発見できなかったのかもしれない。現在は空き家であるが、所有者の会田さんの尽力で何とか保持できているのであろう。

自己紹介

広瀬寿秀

弘前市，青森県

1956年兵庫県尼崎市に生まれる。難波小学校から神戸の私立六甲中学、高校に進学。サッカー部でゴールキーパーとして近畿大会に出場して優勝。その後東北大学歯学部に入学。歯学部サッカー部ではバックスとして初めて点をとる喜びにひたれる。卒業後は同大学小児歯科学講座に入局。3年間、子供の歯科治療に明け暮れるが、口蓋裂チームに入ったことから矯正歯科に興味をもち、助手採用してくれる矯正科という虫のよいところを探していたところ、鹿児島大学歯学部歯科矯正学講座で拾ってもらった。恩師伊藤学而教授のもと途中宮崎医科大学口腔外科に1年間出向を除き、9年間矯正歯科を勉強し、平成7年に妻の実家のある弘前で矯正歯科で開業。趣味は読書(ジャンルは広く、週2冊くらいのペース)、散歩、キリム&絨毯、クロマティックハーモニカ、鍵盤ハーモニカ、サッカーなど。

1956年兵庫県尼崎市に生まれる。難波小学校から神戸の私立六甲中学、高校に進学。サッカー部でゴールキーパーとして近畿大会に出場して優勝。その後東北大学歯学部に入学。歯学部サッカー部ではバックスとして初めて点をとる喜びにひたれる。卒業後は同大学小児歯科学講座に入局。3年間、子供の歯科治療に明け暮れるが、口蓋裂チームに入ったことから矯正歯科に興味をもち、助手採用してくれる矯正科という虫のよいところを探していたところ、鹿児島大学歯学部歯科矯正学講座で拾ってもらった。恩師伊藤学而教授のもと途中宮崎医科大学口腔外科に1年間出向を除き、9年間矯正歯科を勉強し、平成7年に妻の実家のある弘前で矯正歯科で開業。趣味は読書(ジャンルは広く、週2冊くらいのペース)、散歩、キリム&絨毯、クロマティックハーモニカ、鍵盤ハーモニカ、サッカーなど。